沼野充義・沼野恭子・平松潤奈・乗松亨平編著
『世界文化シリーズ⑦　ロシア文化　55 のキーワード』
（ミネルヴァ書房，2021 年）

大 野 斉 子

本書はロシアに関心を持つ学生や一般の読者のための入門書である。その出版物としての位置づけから，定式化した知識が並んでいるのでは，と思われるかもしれない。しかしこの本はロシアのイメージのステレオタイプを破ろうという気運に満ちている。ソ連崩壊後，ロシアにおいて社会そのものが劇的に変化し，ソ連時代の文化が歴史の一部として捉え直されていることを考えれば当然といえるだろうが，それだけではない。この本の特色は，現在までのロシア研究の動向を踏まえた構成と，一つ一つの記事を支える学術的な厚みにある。読み進めれば，テーマに関する言説の歴史や論点，最新の研究の成果を伝える記述から，ここ二十年ほどのロシア研究の変化を読み取ることができる。と同時に，現代においてロシアをどのように見るべきかという俯瞰的な視点も見えてくる。

例として比較的多くの記述に共有されている，二項対立を設定しそこから生まれる論点を推進力として高次の議論へ展開するというスタイルに着目したい。二極の間に広がる多様性と複雑性を掘り起こす眼差しのあり方は，冒頭で沼野充義氏による第 1 章のイントロダクション「ロシアは広すぎる」で明確に示されている。「巨大なロシアは常に一つの原理で統一されてきたわけではない」「歴史的にロシアは二つの極の間で常に揺れ動き，時に引き裂かれてきた」[1] とあるように,「一」という数字で象徴的に示される原理や本質を追究する枠組みではなく,「二」が表す二律背反のような議論性をもつ視点，あるいは二つにとどまらない多様性の追究という枠組みが前提にあることが語られる。

続けてロシアという概念自体が一つの固定的な実体ではなく，そのアイデンティティの揺らぎの中にあること，そこに内包される多様性や振幅の大きさから生み出される巨大なエネルギーがロシアの特長であることが述べられる。これはロシアをどのようにみるべきかというガイドであるばかりでなく，ロシアという題材になぞらえた学術的方法のガイドにもなっている。

上記をはじめとして本書のエッセイには，理解するとはどういうことなのかをめぐる，

[1] 沼野充義・沼野恭子・平松潤奈・乗松亨平編著『世界文化シリーズ⑦　ロシア文化　55 のキーワード』ミネルヴァ書房，2021 年，2 頁。

長年教育に携わってきた編著者たちの知見が生かされているように思う。知識を得ただけでは不十分で，自分がそのテーマをいくつもの角度から考えられるようになると理解は深まっていく。それぞれの項目はどのように当該テーマを考えればいいのか，という論点を複数紹介しているものが多い。議論を行いながら話を進めるのはベーシックな学術的スタイルの一つであるが，本書では，この方法によってエッセイの中に論点を提示することを重視する姿勢が共有されている印象を受けた。このように具体的な知識を提示しながら，それを見る眼差しのあり方，学術領域で共有されている多元的価値の尊重といった姿勢，対立項から論点を引き出す考察の仕方など，学生が考える主体となるために人文系の科目を通して学ぶ様々なことがらをコンパクトに実践してみせる書き方が随所で見られるところも本書の特長である。

各項目は限定された字数であるため，もちろん，その項目に関する膨大な研究の蓄積を見渡すことは不可能である。著者たちはここに書きたいことを凝縮するために腐心されたものと思うが，読者は読み進めながら，考える主体となってそれぞれのテーマを考察する疑似体験ができる。

内容構成に目を向けると，第 1 章「ロシアは広すぎる」から始まり，第 2 章「聖なるロシア」，第 3 章「ロシア史の光と闇」，第 4 章「花開くロシア芸術」，第 5 章「何よりも大事な文学」，第 6 章「日常生活」，第 7 章「ロシアと日本の深い関係」となっている。概論から始まってスラブ民族の信仰の古層から精神世界を探訪し，歴史をおさえたあと，芸術，文学，生活，日ロ関係という具体的な項目へと進む構成である。

とはいえ，1 章の「ロシアは広すぎる」は総説にとどまらず，一般的に知られるその「広さ」に掛けるかたちで多民族性，両首都や大河ヴォルガの表象史，周縁から見える帝国性の問題など「ロシアとは何か」という問いにつながる研究上のトピックが選択されている。1 章の最初は沼野充義氏による「ロシア魂—このあまりにも広く，矛盾に満ちたもの」，最後は編者の一人である乗松亨平氏による「宇宙」と，いずれも分類の難しそうなキーワードである。だが，ロシア帝国からソビエト時代にわたる文化，文学，歴史を射程に入れた該博な説明を追うと，このような精神と物質世界の両面における極大性は様々な研究により指し示される上位概念として浮かび上がってくる。第 1 章に限らず，本書の各項目はこのように協働して複数の論理階型にある概念を想起させる。

宗教と歴史領域を取り扱う第 2 章，第 3 章では各項目が大きなテーマを取り扱っているが，限られた字数の中に盛り込まれた情報の濃密さと多角的視点は各項目ともに碩学による仕事である。いずれも重要なテーマであるが，ロシア学の伝統的な項目に加えて盛り込まれた比較的新しいテーマをいくつか上げてみたい。例えば 2 章の宗教哲学ルネサンスや神秘思想，3 章の強制収容所，女性解放史，亡命などの項目は，いずれも近年研究が進み，主題としての重要性が明確化してきた領域である。

例えば久野康彦氏の「神秘思想—近代の三人の神秘思想家たち」は，同時代の西欧における神智学とのロシアの神秘思想や，グルジエフ，ラスプーチンに光を当て，文化史においても異端的なこうした事象・存在をロシアの精神世界の一部として回復する重要なテーマである。

また編者の一人，平松潤奈氏の「強制収容所」はソヴィエト史やソルジェニーツィンの文学で知られてきた強制収容所を，国内に有する植民地としてのシベリアの社会・歴史的なトポロジー，ソ連の強制収容所システムであったグラーグによる労働力搾取，それと抱き合わせの政治的道徳性の要求など，関連する問題群をその複雑な絡み合いの中に描いてみせた優れた解説となっている。

第 4 章の「花開くロシア芸術」，第 5 章の「何よりも大事な文学」は本書の中でも中核的位置づけにあると見えて，多くの項目が割かれている。4 章では音楽，映画，舞台，絵画，建築，工芸と，芸術にくくられる多くのカテゴリーへ目配りがなされ，ハイカルチャーから大衆娯楽まで社会的位相の点でも幅広い。河村彩氏の「移動展派—ロシアのイメージを創り出す」は，19 世紀後半のロシア絵画を牽引した移動派をロシア性の表象化という現代的観点から紹介する。また同氏の「ロシア・アバンギャルド—実現されかけた芸術革命」では膨大に存在するロシア・アバンギャルド関連のトピックを，革命思想との共鳴，生活自体のデザイン化という志向，そうした「デミウルゴス」的な有り様への後世の評価という形でまとめている。本田晃子氏の「スターリン様式—モスクワの空と地下を制した建築」と熊野谷葉子氏「マトリョーシカ—ロシアとソ連のイメージを背負って」の二点は，それぞれの当該領域の第一人者である両氏の最新の研究を背景に書かれており，こうしたところに日本のロシア文化研究の先端性をみることができる。同様に各ジャンルの項目は，著者たちの研究蓄積が示され，大変読み応えのある記述となっている。

第 5 章は文学である。「何よりも大事な」という修飾語は編者たちのスタンスの表れであろう。文学に割くことができる紙幅が限られるなかで項目は厳選され，19 世紀以降のロシア文学を学ぶ際の定番の主題から近年までの研究成果を反映したものまでが並び，各項目は時代，作家群，歴史的意義などの広い視野から文学を解説する工夫が凝らされている。

古賀義顕氏の「ロシア語—標準語への道のり」は言語史の領域からロシアの近代文学の成立を解説しつつ，言語に見出された民族性の条件としての役割やソビエト以後の言語の変革等からロシア語がいかに観念され，またロシアを構築する手立てであったことをわかりやすくまとめた優れた項目である。

しかし第 5 章のテーマの選定には時代の偏りが見られる。確かに，上記の項目を立てることによって 19 世紀以降に主眼を置いたことが説明されているのだが，あまり知られていないからこそ，第 5 章に 18 世紀以前の文学を扱う項目があったら良かったと思う。

乗松亨平氏の「余計者—一九世紀ロシアのニート？」では，ロシア文学でおなじみの典型である「余計者」に焦点を当て，その特徴と文学史上の解説を端的に説明するところから始まる。しかし，後半では余計者への見方に備わる歪み—資本主義からの疎外をロシアの民衆や伝統からの疎外として理解するという—を指摘し，そのような歪みそのものが余計者文学の最高峰『オブローモフ』に描かれていること，さらにフランス，アメリカの文学との比較やロシア・メシアニズムから言及するなど，論点が階層を駆け上がる様や視点の自在な行き来が非常に面白かった。

第 6 章の「日常生活」では，衣・食・住に加えてスポーツと交通が上げられている。本書の中でも生活者の目線からロシアへの身近な興味を喚起できる章であるが，内容はロシア生活の四方山話ではなく，文化史に視座をおいた学術的な厚みのある項目が目白押しである。多くの専門をもちながらロシアの食文化研究の第一人者でもある沼野恭子氏の「ロシア料理—現代ロシアの食事情」は，ソ連崩壊後から現代にかけて生じたロシアの食文化の変化を，社会の変容と関連付けて解説するものである。日本でも知られる伝統食だけでなく最新の食事情までが網羅され，現代のロシアの人々の価値観が浮き彫りにされている。同氏の「ロシア・ファッション—美意識の変遷」でも同様に，帝政，ソビエト時代，現代という時代の変化とともに歩んだファッションを一望しながら装いの美を巡る価値観が社会的制度とどれほど敏感に連動するのかが語られる。ロシアでは近年，ファッション史の本も増えてきており，ソビエト時代が歴史化する中で成長へ転じた分野の一つだ。

ロシアのイメージを刷新する項目として上げられるのが鳩山紀一郎氏の「大都市の渋滞対策—モスクワで進む都市交通イノベーション」である。交通渋滞という都市が恒常的に抱える問題を背景に交通の具体的な進化を紹介するもので，重厚長大なインフラと不便さがセットであったかつてのロシア社会からの変貌振りが IT 化，利用者本位の都市計画への転換，電気バスの導入など様々な局面から整理される。交通という観点から，生活レベルでモスクワの社会がいかに現代化したかが具体的に伝わってくる。

第 7 章「ロシアと日本の深い関係」は「白系ロシア人—日本の庶民が初めて身近に接した外国人」「ニコライ堂—東方正教の窓」「ジャポニスム—四つの視点から」「ハルキ・ムラカミとドストエフスキー—近代はいまだ超克されていない」の 4 項目からなる。項目数が少ないだけに，各項目の背景に広がる膨大な研究と歴史の広がりを集約的に収めた章となっている。

沢田和彦氏の「白系ロシア人—日本の庶民が初めて身近に接した外国人」は，日本を中継地とした人々を含め，日本にゆかりのあった白系ロシア人と彼らの影響を幅広く紹介した項目である。商業，芸術，教育等に多くの白系ロシア人や二世たちの足跡が示されるが，こうした情報は当然ながら一部に過ぎず，背後に氏の取り組まれる亡命ロシア人研究や，亡命ロシア人研究を行なってきた来日ロシア人研究会の掘り起こした交流の歴史が広がっ

ている。

中村健之介氏の「ニコライ堂―東方正教の窓」はニコライ堂建立の経緯に始まり，日本における正教の毀誉褒貶，宣教師ニコライ，カトリックと比較した正教の教義上の特徴までを記述しており，この項目自体がタイトルの通り，東方正教を一望する窓のように思えてくる。正教を介した交流は文化領域における日ロ関係史の重要な柱をなしている。本項目は知られざる日本史に光を当てた『宣教師ニコライの全日記』をはじめ，中村氏による日本における正教史へのガイドとしても重要である。

今回，書評で挙げさせてもらった項目は一部にとどまるが，この本では掲載されるすべての項目によって日本におけるロシア研究・教育の到達点が示されている。この本が幅広い読者の手元に届くことを願う。